

オマリズマブが有効であった 重症持続型気管支喘息の1例

かつ へ すすむ
勝 部 晋

キーワード：オマリズマブ，重症持続型気管支喘息，全身性ステロイド薬

要 旨

症例は66歳女性。重症持続型気管支喘息でプレドニゾロン 5 mg/日内服，高用量吸入ステロイド，モンテルカストを中心とする加療にても症状のコントロール不良であり頻回に全身性ステロイド薬の追加投与を行ってきた。血清総 IgE 値は 74 IU/ml，特異的 IgE 抗体検査でヤケヒョウヒダニがクラス 2 であった。オマリズマブ 150 mg/回を 4 週毎で投与した。PEF (peak expiratory flow) は投与後 2 日目より上昇し咳嗽，呼吸困難などの臨床症状は著明に改善した。ACT (asthma control test) はオマリズマブ投与後 1 年にわたって 23 点以上を維持した。定期外受診はほとんどなくなり，全身性ステロイド薬の追加投与はオマリズマブ投与後 1 年間行わなかった。重症持続型気管支喘息にオマリズマブが奏功した症例と考えられた。

はじめに

気管支喘息は気道の炎症，可逆性の気道狭窄と気道過敏性の亢進がその病態の本質であると考えられている。治療としては，わが国の「喘息予防・管理ガイドライン 2009」(JGL 2009) では吸入ステロイド薬 (ICS) を中心としてさまざまな長期管理薬の使用が推奨されている¹⁾。ICS の普及によって多くの喘息患者の喘息症状の改善や，救急外来の受診頻度および喘息増悪による入院頻

度が減少している。しかし高用量の ICS と種々の長期管理薬を併用してもコントロール不良な重症持続型喘息も存在する。ヒト化抗ヒト IgE モノクローナル抗体であるオマリズマブはこのような難治性喘息でアレルギーの関与がある場合の選択肢として最近注目されている。

オマリズマブは遊離 IgE の 3 番目の C 領域である C₃ に結合することにより高親和性 IgE 受容体と IgE の結合を阻害し²⁾，肥満細胞などでの IgE を介した反応を抑制するとされている。臨床的にも急性増悪頻度の減少，喘息コントロールの改善が認められており³⁾JGL 2009 では治療ステップ 4 に含まれている¹⁾。